

## ASD 児の行動獲得を促す弁別学習型ビデオプロンプトの効果に関する実証的事例研究 ー学習原理に基づいたビデオベース介入技法の精緻化ー

### 問題と目的

自閉スペクトラム症 (ASD) 児の行動獲得を促す介入法として、ビデオベース介入 (VBI) がある。VBI とは、標的行動を指導するために作成したビデオ映像を対象者に提示する介入の総称である。VBI にはビデオモデリング (VM) やビデオフィードバック (VF)、ビデオプロンプト (VP) 等、いくつかの形式がある。Clinton, et al. (2016) は VBI に関する先行研究のレビューを行った。また、VBI の下位形式として、VM、ビデオセルフモデリング、Point of view video modeling (PoVM)、VF、VP の 5 つの形式を分類した概念図を作成した。

しかし、Clinton, et al. (2016) の概念図には 2 つの課題が残されている。それは (1) VBI の各形式がどのような学習原理に基づいているのかという構成要素が含まれていないこと、(2) 3 つの形式に分類された VP はそれぞれの構成要素が異なっているにもかかわらず、「VP」という同一の名称で定義されていることである。この 2 点の課題を踏まえ、新たに VBI を学習原理に基づいて分類した概念図を作成した。その結果、VBI を Scene view VM (SVM)、PoVM、VF、Scene view VP、Point of view VP、弁別学習型 VP の 6 つの形式に分類した。

本研究では、VBI を学習原理に基づいて分類した概念図によって新たに定義された弁別学習型 VP の効果を検討した。また、多くの先行研究から VBI の有効性が報告されているが、一部の研究では VBI 単体の効果が限定的であった事例も報告されている (Plavnick, MacFarland, & Ferreri, 2015)。そのため、簡易的な VBI であるモデルの観察学習に基づいた VM や VF を先に導入し、効果が十分に得られなかった場合に、続けて弁別学習に基づいた弁別学習型 VP を導入するビデオベース介入 (弁別学習型 VP を含むビデオベース介入) の適用可能性についても検討することとした。

### 研究 1 中度知的障害がある ASD 児を対象とした社会的スキル「大丈夫？」の獲得および般化を促すビデオプロンプトの効果

ASD 児の多くは社会的スキルの獲得や般化に困難さを抱えている。社会的スキルの一つとして、困っている相手に「大丈夫？」と声をかけるスキル (社会的スキル「大丈夫?」) は、相手を気遣う共感の言葉として重要なスキルであると考えられる。VBI を学習原理に基づいて分類した概念図によって新たに定義された弁別学習型 VP は、社会的スキル「大丈夫?」が求められる場面をビデオ映像として提示し、そのビデオ映像に対して、社会的スキ

ル「大丈夫？」を実行するよう指導することができるため、最適な介入法であると考えられる。しかしながら、VP を用いた先行研究ではモデルによる模倣学習の効果と言語プロンプトによる弁別学習の効果が混合した結果となっているため (Bennett, Crocco, Loughrey, & McDowell, 2017)、弁別学習型 VP の効果は検討されていない。

そこで、研究 1 では 2 名の中度知的障害のある ASD 児を対象に社会的スキル「大丈夫？」を標的行動として弁別学習型 VP の効果を検討することを目的とした。まず、ASD 児を対象とした介入法として、簡易的かつ代表的な言語プロンプトを実施した。言語プロンプトの効果が限定的であった場合に続けて弁別学習型 VP を実施することで、社会的スキル「大丈夫？」の獲得と般化が促されるか否かを検討した。指導の結果、2 名とも社会的スキル「大丈夫？」が獲得され、未指導場面および家庭場面における般化も生じた。これらの結果から、弁別学習 VP を用いた指導を行うことで、中度知的障害のある ASD 児における社会的スキル「大丈夫？」の獲得と家庭場面への般化に対する有効性が示された。

## 研究 2 自閉症スペクトラム障害児の日常生活スキルに対するビデオベース介入の効果—入浴スキルの獲得と般化—

多くの ASD 児は、日常生活スキルの不足が指摘されている。ASD 児の日常生活スキルの獲得や般化に効果的な介入法として、VBI が注目されている (Rayner, Denholm, & Sigafos, 2009)。VM は科学的根拠に基づいた実践の一つとして評価されている一方で (Corbett, 2003)、VM の効果が十分に得られなかった事例も報告されている (Plavnick, et al., 2015)。VP は VM と比べ、注意持続や記憶保持の弱さを抱える対象者、長い標的行動または複雑なタスクに対して VP は最適な介入法である (Kellems, Frandsen, Hansen, Gabrielsen, Clarke, Simons, & Clements, 2016)。特に弁別学習型 VP は模倣学習に基づく VM とは異なり、弁別学習に基づいた介入法であるため、VM の効果が十分に得られなかった対象者や標的行動に対して効果的であるかもしれない。

そこで研究 2 では、入浴場面で自分の体を洗うことが困難な ASD 児 1 名を対象に、簡易的な手続きである VM を先に実施し、VM の効果が十分に得られなかった場合に続けて弁別学習型 VP を導入するビデオベース介入の効果を検討した。指導の結果、VM の介入効果は限定的であったが、続けて弁別学習型 VP を導入したことで、入浴スキルの獲得と般化を促すことができた。これらの結果から、簡易的な手続きである VM を実施した後に、続けて弁別学習型 VP を導入するビデオベース介入を行うことで、ASD 児の入浴スキルの獲得と家庭場面への般化に対する有効性が示された。

### 研究3 ゲームで負ける場面でASD児が示す不適応行動の減少と適応行動の獲得を促すビデオベース介入の効果

ASD児の多くは社会的スキルの不足に加えて、情動の障害を伴うことがある。これらの問題はゲームの勝敗や順位が決まる遊びの中で不適応行動として表面化しやすい。ASD児の社会的スキルや不適応行動の改善に対する効果的な介入法として、VFが注目されている。VFはVMと同様、ビデオ映像を対象者に提示するという簡易的な手続きであり、社会的スキルの形成や不適応行動の改善に大きな成果をあげてきた(Deitchman, Reeve, Reeve, & Progar, 2010)。しかし、それらのほとんどの研究では、追加介入が併用されているため、VF単体の効果はあまり検討されていない(Deitchman, et al., 2010; Thiemann & Goldstein, 2001)。VPはこれまで日常生活スキルに対して大きな成果をあげてきたが(Cannella-Malone, Sigafos, O'Reilly, de la Cruz, Edrisinha, & Lancioni, 2006)、社会的スキルの指導や不適応行動の改善に対する効果はほとんど検討されていない。しかし、弁別学習型VPは不適応行動が生じる場面をビデオ映像として対象者に提示する。その映像に対して不適応行動ではなく、代替となる適応行動を実行することを指導できるため、最適な介入法であると考えられる。

そこで研究3では、ゲームで負ける場面で不適応行動がみられる3名のASD児を対象に、簡易的な手続きであるVFを先に実施し、VFの効果が十分に得られなかった場合に続けて弁別学習型VPを導入するビデオベース介入の効果を検討した。指導の結果、VFの介入効果は限定的であったが、続けて弁別学習型VPを導入したことで、不適応行動の減少と社会的スキル「負けの対処」の獲得を促すことができた。これらの結果から、簡易的な手続きであるVFを実施した後に、続けて弁別学習型VPを導入するビデオベース介入を行うことで、ASD児のゲームで負ける場面で示される不適応行動の減少と社会的スキル「負けの対処」の獲得に対する有効性が示された。

### 研究4 自閉症スペクトラム障害児の挨拶スキルの獲得を促すビデオベース介入の効果

ASD児は自発性の障害を抱えているため、コミュニケーションスキルの獲得や般化が難しいといわれている。特に挨拶スキルは、相手から発せられた言語刺激を弁別刺激として、何らかの言語反応を表出するお礼スキルや応答スキル等とは異なり、対象者自身が自発的に言語反応を表出することが求められる。VMの先行研究において、ASD児の挨拶スキルを標的行動とした指導は行われているものの(Charlop-Christy, Le, & Freeman, 2000; Kouo, 2019)、その効果は限定的であったことが報告されている。また、VPをコミュニケーションスキルに適用した研究はほとんど行われていない。しかし、弁別学習型VPを用いた場合、自発的な挨拶スキルが求められる場面をビデオ映像として提示することができる。そし

てそのビデオ映像に対して、自発的な挨拶スキルを実行するよう対象者に指導することができるため、最適な介入法であると考えられる。また、VBI の効果を十分に得るための要因の一つに、対象者の前提スキルが指摘されている (Delano, 2007; McCoy & Hermansen, 2007)。現段階では対象者がどのような前提スキルを有することによって、VBI の効果を高めることができるのかについては明らかになっていない。しかし、観察したモデルの標的行動を言語化した方が、標的行動の獲得が促進されるという報告がある (永野・柏木, 1974; 坂野, 1978)。

そこで研究 4 では、自発的な挨拶をすることが難しい 5 名の ASD 児を対象に、簡易的な手続きである VM を先に実施し、VM の効果が十分に得られなかった場合に続けて弁別学習型 VP を導入するビデオベース介入の効果を検討した。また、VM の実施時にビデオ映像に提示されたモデルの行動を言語化する課題を行い、VM の効果との関連についても検討することとした。指導の結果、2 名の対象者に対して VM は効果的であったが、残りの 3 名の対象者にとって VM の効果は限定的であった。しかし、続けて弁別学習型 VP を導入することで、3 名とも挨拶スキルの獲得を促すことができた。これらの結果から、簡易的な手続きである VM を実施した後に、続けて弁別学習型 VP を導入するビデオベース介入を行うことで、ASD 児の挨拶スキルの獲得に対する有効性が示された。また、VM の効果と言語化の結果との間に関連性があることが示唆された。

## 総合考察

本研究で行った各事例研究をまとめ、弁別学習型 VP の効果と弁別学習型 VP を含むビデオベース介入の適用可能性について考察した。また、本研究の結果をもとに、対象者のスキルに応じたビデオベース介入の選択モデルを提案し、本研究の限界と展望について論じた。